

キャリアパス支援講演会 実施報告書

【演題】 ノーベル賞の薬イベルメクチンを妊婦や子供に届けるために
～女性薬剤師が研究者となり夢の実現へ～

【講師】 小茂田 昌代 氏（東京理科大学薬学部薬学科 教授）

【日時】 令和2年1月28日（火） 15:00～16:30

【場所】 岐阜薬科大学本部 第二講義室

【参加者数】 104名（うち女性研究者 6名）

所属機関：岐阜薬科大学 99名、岐阜女子大学 1名、アピ株式会社 4名

講師は、現職の大学教授に至るまで、研究職と病院薬剤師と経験し、学位を取得した。研究職であるあいだに出産され、保育園に預けながら仕事を続けたという。昭和50年代後半～60年代、子供を預けて働くからには意義のある仕事、世の中の役に立つ仕事をしたいという気持ちを支えに頑張ってきた。

講演では、テーマにあるとおり、ノーベル生理学・医学賞受賞で注目されたイベルメクチンについて、日本で発見されたにもかかわらず国内未認可であった薬が厚生労働省において承認されるまでの活動・取組みについて紹介された。エビデンスを出すため臨床試験を行ったが、この経験により、臨床試験から薬剤師が関与していくことの重要性を実感したという。大学の研究室の第一歩が苦しんでいる患者を救うこともある。薬剤師とは、薬がないのであれば患者を守るために動かなければ存在意義がないと実感したという。

また、疥癬治療に有効であるイベルメクチンを、子供から大人まで安全に使用できるように研究してきたことを紹介していただいた。ここでも、疾病治療チームとして、病気を治療する医師だけではなく、薬を適切に使用するために薬剤師の存在意義があると話された。

最後に、講師の現在の研究テーマの一つでもある日本版アカデミック・ディテリング（公正中立な基礎を臨床につなぐ科学的視点とエビデンスを基に医薬品比較情報を能動的に発信する新たな医薬品情報提供アプローチ）について、紹介された。**医薬品について患者への丁寧な説明以上に、医師に説得力をもって説明することにより医師の処方行動に影響を与えることができる。結果、患者を救うことになる。薬剤師にはまだやるべきこと、できることがある。**

薬剤師を目指す学生に、「薬剤師になるのは、活躍するため。医師が知らないこと、分からないことを薬剤師は行うことができる。薬の専門家として処方の最適化に貢献して。」と激励の言葉をうけた。

今回の講演会では学部生が多く聴講しており、臨床薬剤師と研究者と両者を経験している講師の話は非常に有意義で、卒業後のキャリアパスがイメージしやすかったと思われる。若手の研究者・薬剤師にとっても自分の現時点の課題や、今後に向けて取り組むべきことなど、具体的に考えることができる有意義な機会となったと思われる。

